



趣味を通じた生きがづくり

十人十色

Vol.13

酷道巡り

〚国道なのに酷い、にギャップ萌え



今は撤去された「落ちたら死ぬ!!」の看板

鹿取 茂雄 さん
 会社員

【かとり・しげお】1977年岐阜県出身。工業用薬品メーカーの研究員として働いたかわら酷道愛好家として酷道ファンのネットワーク「TEAM酷道」を主宰。酷道を軸に興味の対象は廃墟、団地、給水塔などにも派生し、イベント開催や書籍執筆といった活動も行っている。
 ●TEAM酷道のホームページ
<http://teamkokudo.org/>

——鹿取さんはドライバーに酷な国道〚酷道、巡りが趣味だそうですが、酷道なんて誰が言い始めたんでしょうね。

一度調べたことがあるんですけど、40年以上前の国会答弁で、誰かが「国の道なのに酷いじゃないか。こんなのは酷道だ」と言ったという記録がありました。

——そんな昔からあった言葉だとは意外！

そうなんです。酷道にはいくつかタイプがあって、1つは険しい道です。1車線しかないうえ道幅が狭く、片側が崖になっていて、対向車と行き違いができない道もあれば、線形としてすごくグネグネしている道もありますし、路面の舗装すらされていない道もあります。

もう1つは市街地にあるタイプです。市街地ゆえに道路が拡幅できず、両側に建物や住宅がびっしり建っている。その最たるものが商店街のアーケードの中にある酷道で、全国に2カ所しかありません。大阪と長崎にあるんですが、アーケードだから車は昼間、通れないんですよ。

——車が夜しか通れないって、本当に国道なんですか？

入口にちゃんと「国道」の標識が立っていますからね。その他、青森県には全国で唯一の「階段国道」があります。

——国道自体は全国にどのくらいあるのでしょうか？

国道は1号から507号までありますが、路線の数は459です。要は欠番が結構あるんですね。明治時代に創られた国道制度では1級国道と2級国道があって、1級国道には1～57号、2級国道には101号以降の番号が振られました。国道は江戸時代の街道など人が歩いていた道を基に造られ、その後、車の普及に伴って整備されていったという経緯があるから、車が通れない国道もあるし、整備状況によって差が出てくるんです。

——鹿取さんはこれまで何カ所の酷道に行かれたのですか。

酷道の基準は人によって異なるので難しいんですが、私の基準では10年ほど前で約100カ所ありました。それが今は60カ所くらいで、私はすべて行っています。酷道って徐々に減っていくんですよ。整備されて酷道じゃなくなっていくから。

——なるほど。それにしても酷道の何が面白いのですか。

スリルもあるんですけど、そもそも国道って国の道じゃないですか。都道府県道や市町村道、私道と色々ある道路

の中では最高ランクのはずですよ。それなのに酷い。そのギャップ萌えです。だから国道であることが絶対条件です。

——鹿取さんが酷道巡りにハマったきっかけは何ですか。

運転免許を取って初めてドライブした道が酷道だったんです。紙の道路マップを見ながら、「初めてだから、交通量が多い道は避けたいし、なるべく車線変更はしたくない。でも道幅は広いほうがいいから、国道だったら間違いないだろう」と思って選んだ道がすごかった（笑）。

——すごいとは、どんな風に？

岐阜から福井に抜ける峠にある国道なんです。カーブが続く狭い道で、片側は絶壁で反対側は50m以上の崖。そこに立てられていたのが「危険 落ちたら死ぬ!!」という看板でした。

——「落ちたら死ぬ」ですか！ それは衝撃的ですね。

でしょ？ しかも夜だったので死ぬ気で何とか走り抜けた後は、駐車場に車を停めてしばらく放心状態でした。その時は「もう二度と行くもんか!」と思ったものの、運転に慣れてきた頃、嫌な思い出を書き換えるつもりで行ったら、怖さが楽しさに変わっていました。そこからハマっていきましたね。

——目的地の酷道はどうやって探されるのですか。

国道は赤、県道は緑などに色分けされ、道幅も忠実に反映された道路マップがあって、それを頼りに探しています。

——昔と違って、今はカーナビがありますけど。

残念ながら、カーナビは酷道を選んでくれないんですよ。

——酷道ファンからの評価が高い酷道はどこですか。

私が最初に行った酷道はかなり高評価ですし、岐阜県には良い酷道が集中しています。

——他の酷道にも「落ちたら死ぬ」の看板はあるんですか。

「転落注意」くらいですね。「死ぬ」という表現は、唯一そこだけだったのですが、一昨年に撤去されました。かなり大きなニュースになりましたよ、酷道ファンの間では。

——最後にこれからやりたいことを教えてください。

酷道を走りながら気になった場所には必ず立寄りまして、行く先々で出会った人から話も聞きます。そうやっていろんな人やモノのストーリーを知ることが、贅沢なんじゃないかと。これからもとことん突き詰めていきたいですね。